日本赤十字豊田看護大学紀要７巻１号，133－144，2012

資　料

大学生の友人関係のありかたとアイデンティティの発達

鈴木貴美子[1]　長江美代子[2]

要　旨

統合的文献検討により友人関係のとり方とアイデンティティ確立の関係性について考察した。アイデンティティの確立がみられる青年は、他者への基本的信頼や関係調整能力が高く、友人に自己を表現するという共通点がみられるが、友人と密着している青年と、友人と関わることが少ない青年に分かれた。アイデンティティが確立できていない青年は、他者への基本的信頼感が低いことが共通で、他者からの評価懸念は低く友人との関わりが希薄である青年と、他者からの評価懸念や賞賛欲求が強く、表面的な形だけの友人関係を求めている青年に分かれた。自我の確立には自己の内面を表現することが重要であり、友人との関係の持ち方が表面的な青年は、本音で深く交流できる青年と比較すると、自己斉一性・連続性をもった主観的な自分と社会から見た自分との同一化の感覚が未熟である。この感覚は、表現することで自己を形づくり、友人の視線で自分を確かめながら確立されていく。

キーワード　統合的文献検討、大学生、友人関係、アイデンティティ

Ⅰ　はじめに

青年期にある大学生は親からの自立の時期にあり、自分の方向性を考えて職業を決定しなければならない。大学生の就職内定率 80.5％という数値が示すように、ほとんどの学生は職につき何らかの形で社会参加していくが、その３分の１は３年以内に離職している（厚生労働省，2011）。就職してから就業が長く続かない青年たちの現象は、職業決定の場面で、業種や職種と自己の適合性よりも、組織の安定性や知名度といった組織属性が重視されてきた社会の風潮に加え、明確な自己概念をもたないまま職業を決定した学生たちの戸惑いの反映であると考えられている（東，津本，安達，2002）。下山（1986）も、職業決定を青年期の自我の発達課題と位置づけ、大学生の自我の形成と職業決定の重要な関連を指摘している。大学進学に際して、偏差値を頼りに自らの進路を決定してきた若者にとって、自分自身がいったい何者であるのか、自分は何をしたいのか、どのような適性があるのかということが明確になっていない。これらの青年は、自己を自分で客観的に評価する方法を身につけていないにもかかわらず、学生時代に自分のやりたいことや自分の適性を知り、自我に従って進路（職業）を決定していくことが必要とされているのが現状である（東，津本，安達）。

友人関係は Erikson が青年期の発達課題においたアイデンティティの確立を達成する、あるいは失敗する上での要因の一つである。好ましい友人関係を持つことでアイデンティティの確立が促されれば、青年たちは大学在学中に自己の将来について考えることができる。その結果職業決定の際にはそれぞれ納得のいく自己決定にもつながるはずである。本研究では、自立した社会人になる準備段階の大学生にとって、自己のアイデンティティの確立を促すような友人関係とはどのようなものか文献検討により探求する。この研究から得られた知見は、発達段階において自己のアイデンティティの確立を促す友人関係のモデルを考える上で重要な情報を提供できる。

[1] 名古屋第二赤十字病院　日本赤十字豊田看護大学四期生
[2] 日本赤十字豊田看護大学　精神看護学

目的

大学生の友人関係のとり方とアイデンティティの確立の関係性について明確にする。

定義

青年：本研究では社会参加の準備段階にある青年として、4年制大学に通う大学生１～４年生とする。

アイデンティティの確立：斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が、周りからみられている社会的な自分と一致するという感覚を持つこと（Erikson, 1959）。

Ⅱ．文献検討と概念枠組み

１．モラトリアム（猶予期間）と現代青年の特徴

鑪（2002）は、Erikson のいうモラトリアムを高等学校教育や大学教育の期間としている。そしてこの期間は、社会が青年たちにアイデンティティを確立することを期待して提供した、アイデンティティ形成の主要な期間と捉えている。一方、高学歴化した今日の社会では、大学を卒業した後就職という形で社会参加していく青年が多くなっている現状がある。結果として青年期は延長し、アイデンティティ形成の課題に取り組む年齢は、鑪が考えていたより高くなっていることが指摘されている（落合，伊藤，斎藤，2004）。

青年期の延長は小此木（1984）のいう「モラトリアム人間」へとつがっていることが示唆される。小此木は、モラトリアム人間とは「社会的、文化的なアイデンティティを、青年期に確立するために社会から与えられたモラトリアム（猶予期間）をいつまでも遷延させて、一向に社会人としての自分を確立しようとしない」（p. 84）人間であると定義づけている。モラトリアム人間は、自己中心的な自己愛を、周りからの賞賛や業績の達成など直接的に得られる満足で満たそうとすることや、激しい自己主張や他者との競争など直接的な攻撃性を見せないやさしさの特徴がある。やさしさの裏には他者とぶつかることを避け、人は何をしようが自由だという態度と同時に、何をやろうと自分には関係ないという無関心さや、深いかかわりを避け厄介なトラブルに巻き込まれないように振舞うという側面がある（小此木）。モラトリアム人間の無関心さと自己を主張し表現しない他者との関わり方は、青年たちの友人関係の希薄化につながっている（堀岡，2009）。

大学生のアイデンティティの状態と友人関係の関係についての調査では、付き合いの深さと相手との心理的距離からみて、アイデンティティが確立している者は、確立していない者と比較して安定した友人関係が持てることを報告している（古野，藤原，2003）。そして、友人に自己を開示する姿勢が目的意識の明確さや社会への順応を高めるという報告もあり（松下，吉田，2009）、青年の心理的発達と友人との付き合い方に関係があるといえる。これらのことは、他者に無関心であり相手との心理的距離をとることを特徴とするモラトリアム青年の表面的な友人関係はアイデンティティの確立を妨げる可能性があることを示唆している。

２．アイデンティティ

Erikson（1959）によれば、自我同一性の感覚は、「内的な斉一性（sameness）と連続性（continuity）を維持しようとする各個人の能力（心理学的意味での個人の自我）と、他者に対する自己の意味の斉一性、連続性とが一致したときに生じる自信（p.112）」である。つまり自我同一性は、斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が、周りからみられている社会的な自分と一致するという感覚を表す概念であるといえる。この自我同一性は、自己の内面への強い関心と、人間のライフサイクルの各段階における重要な他者（significant others）との関わりを通じて形成されていき、その対象は母親から親、家族、仲間、パートナーへと移行していくという。

鑪と山下（2003）は Erikson（1959）の提唱したアイデンティティの概念を多重的なものに発展させた。自己を中心におき、次に自分を取り巻く家族、その外側には家族を取り巻く集団、そして集団をとりまく社会、国家、文化というように、これらを、自己意識を中心に同心円を描くいくつかの層として分けて考え、それぞれの円にアイデンティティという言葉を適用した。つまり、中心に自己が存在し、それから所属する家族や家としてのアイデンティティや職業人としてのアイデンティティなどが存在するのである。そして、鑪は Erikson の考えを引き継いで、アイデンティティの危機には２つの面があると言っている。１つ目は連続性ないし一貫性である。これは生まれてから現在まで続いている過去の自分に確信を持てるかどうかの歴史的感覚である。もうひとつは社会性ないし空間性である。これは経験を他人と共有していること認めると同時に、その経験について自分の独自性をも認めるという感覚と説明している。自己のレベ

ルでは、「自分とは何だろう」とか、「自分の生きがい」といったものであり、「他者に向かって表現しようという構えの中で自分を感じるとき、そしてそこで感じ取れたものを表現するとき、『自分というもの』が形をとって現れてくる（p59）」といっている。したがって、アイデンティティの形成には他者との関わりの中で自己表現していくことで主観的に自分の考えや自分の存在について考えをまとめ、他者に自己を表現したときの反応をみて客観的にみた自己を確認していくという作業のもとで確立していくと考えられる。

３．概念枠組み

以上から、友人関係はアイデンティティの確立に影響を及ぼしており、人とのかかわりの中で自己を表現することで自分とはなにかを振り返り、アイデンティティを確立していく。したがって、自己の内面を表現するような関わり方をしている青年はアイデンティティの確立の傾向が見られ、友人関係に積極的でないものはアイデンティティの確立が見られないと考えられる。

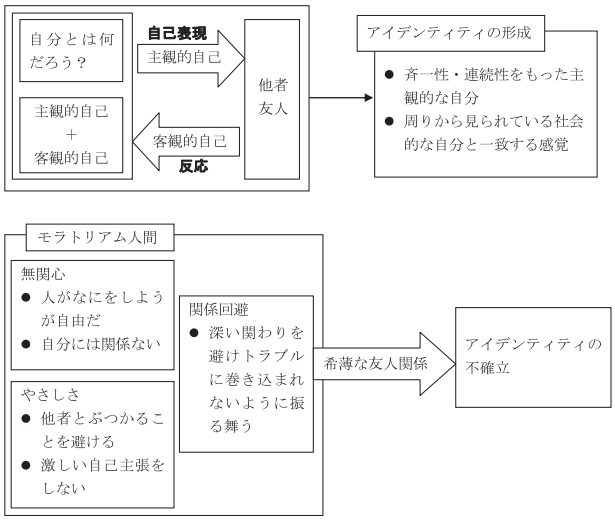

図１　概念枠組み：対人関係とアイデンティティの確立

Ⅲ　研究方法

１．研究デザイン

統合的文献検討をもちいて、友人関係のとり方とアイデンティティの確立の関係性について明確にする。

２．対象

友人関係のとり方とアイデンティティの確立の関係性に関する文献のうち以下の選択基準に合致したものを研究対象とする。

１）文献選択基準

（1）1998 ～ 2010 年の期間に出版された原著・研究報告・書籍を含む文献。

（2）日本語で執筆された文献。

（3）研究対象が大学生、高校生または中学生。

（4）対象者の友人関係のとり方とアイデンティティの両方に焦点を置いている文献。

（5）対象者の友人関係のとり方と心理的側面の両方に焦点を置いている文献。

３．データ収集

友人関係・大学生・青年期・アイデンティティ・自我同一性をキーワードに、コンピュータによるデータベースから On-line 文献検索し、収集した文献の引用文献目録からの手動検索を実施し、選択基準を満たした文献を研究対象とした。

４．分析方法

大学生の友人関係のありかたとアイデンティティの発達に関するテーマを抽出し、カテゴリー化して整理し、さらにテーマ間の関係を示すことで、友人関係のとり方とアイデンティティの確立の関係性について明確にした。

Ⅳ．研究結果

１．対象文献の概要

友人関係・大学生・青年期・アイデンティティ・自我同一性のキーワードによる On-line データベース〔論文情報ナビゲータ［サイニィ］CINII〕から得られた文献は 283 件であり、得られた文献の引用文献リストから入手した 5 件の合計 288 件の各文献の概要を読み選択基準に合致した 9 文献を最終的に研究対象とした。得られた文献の種類は、原著 2 件、研究報告 7 件であった。

8 件の文献は「アイデンティティの状態と友人関係のとり方の特徴」と、「友人関係のとり方と青年の心理的側面の特徴」に 2 分類し、アイデンティティの発達と友人関係のとり方について分析した。

残りの文献１件は、アイデンティティの状態の表現が他文献とは異なったため別にまとめた。

２．アイデンティティの状態と友人関係のとり方の特徴

アイデンティティの状態と友人関係のとり方について示した文献４件（松下，吉田，2009；堀岡，2009；辻，2004；宮下，1998）を用いて比較し分析する（表１）。

松下と吉田（2009）は、友人関係の取り方を、楽しい雰囲気になるように気を遣う「気遣い群」、積極的に友人との快活な関係を求め、友人に自己を開示する関わりをしている「積極群」、お互いのプライバシーに入ることなく、友達に甘えすぎない、心を打ち明けることに負のパスをもつ「関係回避群」の３群に分類している。自我同一性の尺度として多次元自我同一性尺度（MEIS）を用いて測定しており、３群の中で自我同一性との関係で有意な正の相関がみられるのは「積極群」だけであった。

堀岡（2009）の研究は、友人関係の取り方を、友人に対して深い良好な関係を築いている「良好群」、友人に対して表面的関係を保ち、友人に対して配慮しない「無関心群」、友人に対する気遣い・他者からの評価懸念が高く、友人関係は表面的である「表層群」、深く本音で関わる友人関係を持つが、内省傾向が低く、軽い生き方や楽しさを追求している「刹那群」の４群に分類している。松下と吉田（2009）と同様に多次元自我同一性尺度（MEIS）を用いて測定しており、「刹那群」や「良好群」は多次元的に自我同一性の発達がみられ、「無関心群」「表層群」は発達がみられない。

辻（2004）の研究は、自己像の不明確感を肯定回答した「不定型」、自己像の不透明感を否定し、多元的自己感覚を肯定回答した「多元型」、自己像の不透明感も多元的自己感覚も否定回答した「一元型」の３つに分類した。「多元型」は、複数の中心をもち複数の円が緩やかに束ねられた自我構造で、部分的に表面的でない関係をとり、本当または偽の自分を使い分ける。「一元型」は、友人によってキャラクターの切り替えがなく、自分らしさを持ちアイデンティティは安定している。「不定型」は、自己の不明確感を持つだけでなく、友人関係の満足度や被理解感・信頼感が低い。

宮下（1998）は、友人関係とアイデンティティについて、「精神的な安らぎ・相互信頼」「社会性」「社交性」がアイデンティティと有意な正の傾向があるとしている。

以上の４文献から、アイデンティティが確立されている青年、アイデンティティの確立が見られない青年、アイデンティティの部分的な確立について要約した。

１）アイデンティティが確立されている青年

(1) アイデンティティの状態

「対自的同一性」「心理社会的同一性」の正のパスが見られ（松下，吉田 , 2009）、自己斉一性・連続性、心理・

表１　友人関係のとり方の特徴とアイデンティティの状態

	友人関係のとり方	友人関係のとり方
松下，吉田（2009）	気遣い群	自我同一性のすべての次元への有意な負のパス「対自的同一性」
	積極的群	「心理社会的同一性」への有意な正のパス
	関係回避群	「自己斉一性・連続性」、「対他的同一性」への有意な負のパス
堀岡（2009）	自己斉一性・連続性因子	良好群・刹那群＞無関心群・表層群
	心理・社会的同一性因子	良好群・刹那群＞無関心群・表層群
	対自的同一性因子	刹那群＞無関心群
	対他的同一性因子	良好群・刹那群＞無関心群・表層群
	社会的スキル	刹那群＞無関心群・表層群
辻（2004）	多元型のアイデンティティ	一元型と同水準の自分らしさの感覚をもち、一貫主義は高い。アイデンティティの不安定につながるところがある。
	自分らしさの感覚がある者	他者からの被理解感や関係満足感が高い傾向。
	アイデンティティ不定型	友人関係の満足度や被理解感・信頼感は低い。
宮下（1998）		「精神的な安らぎ・相互信頼」「社会性」「社交性」がアイデンティティと有意な正の傾向

注釈：「＞」「＜」は、比較する群の有意差を不等号で表現している。
例：自己斉一性・連続性について、良好群・刹那群＞無関心群・表層群と表記している。「良好群及び刹那群は無関心群及び表層群に比べて有意に自己斉一性・連続性がみられる」ということになる。

社会的同一性、対自的同一性、対他的同一性が有意に高く（堀岡，2009）、自己像の不透明感がなく、自分らしさの感覚がある（辻，2004）。

（2）友人関係の特徴

アイデンティティの確立している青年友人関係の特徴として、積極的に友人との快活な関係を求め、友人に自己を開示する関わりをしている積極群（松下，吉田，2009）や、深く本音で関わる友人関係を持つが内省傾向が低く、軽い生き方や楽しさを追求している刹那群（堀岡，2009）、友人によってキャラクターの切り替えがない一元型（辻,2004）がある。そして、宮下（1998）は「精神的な安らぎ・相互信頼」「社会性」「社交性」がアイデンティティと有意な正の傾向あるという結果を出している。

２）アイデンティティの確立がみられない青年

（1）アイデンティティの状態

自我同一性のすべての次元への有意な負のパスがみられ（松下，吉田，2009）、自己斉一性・連続性、心理・社会的同一性、対自的同一性、対他的同一性が有意に低く（堀岡，2009）、自己像の不明確感がある（辻，2004）。

（2）友人関係の特徴

傷つくことを恐れ、気を遣う青年（松下，吉田，2009）が見られる一方、堀岡（2009）は表面的関係を保ち、自分の都合を優先し友人に対して配慮しない無関心群があると述べている。辻（2004）は、自己像の不明確感がある青年は親子関係・友人関係のいずれについても、満足度や被理解感・信頼感などが低いと結果を出している。

３）アイデンティティの部分的な確立

（1）アイデンティティの状態

「自分のまとまり感や常に自分であるという感覚（自己斉一性･連続性）」「他者からみた自分」「対他的同一性」への有意な負のパスがみられ（松下，吉田，2009）、「自己斉一性･連続性」「自分を社会的に位置づける感覚（心理・社会的同一性）」「対他的同一性」が有意に低い（堀岡，2009）。辻（2004）は、多元型のアイデンティティを有する者は一元型と同水準の自分らしさの感覚をもち、自分らしさの一貫主義は一元型よりもむしろ高くなっているが、一元型よりもアイデンティティの不安定につながるところもあるという結果を出している。

（2）友人関係の特徴

お互いのプライバシーに入ることなく、心を打ち明けることに負の相関をもつ関係回避の特徴（松下，吉田，2009）がある一方、友人に対する気遣い・他者評価懸念が高く、友人関係は表面的である表層群（堀岡，2009）の特徴がみられる。辻（2004）は複数の中心をもち複数の円が緩やかに束ねられた自我構造で、部分的だが表面的でない関係をとり、本当あるいは偽の自分を使い分ける多元型の特徴を見出している。

アイデンティティの確立がみられる青年は、自我同一性確立の尺度が有意に高く自分らしさを自覚している。友人関係は積極的で自己を開示する、深く本音で関わるというのが特徴的である。アイデンティティの確立がみられない青年は、自我同一性確立の尺度が有意に低く自己像が明確でない。友人関係は、他者評価を意識し友人に気を遣う青年と、気遣いや他者評価の意識が低く自己中心性の高い青年の２種類がみられた。アイデンティティの部分的な確立の青年が、「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」が有意に低く、友人関係は、友人と深い関わりを回避し心理的距離をとる青年と、友人に気を遣い表面的に付き合う青年の２種類がみられた。

３．友人関係のとり方と青年の心理的側面

友人関係のとり方とその心理的側面や社会的スキルについて示した文献４件（石本，岩本，2009;松永，岩元，2008；岡田，2007；中園，野島，2003）を比較し分析する（表２）。

石本ら（2009）は中学生・高校生を対象に研究し、友人関係が途切れないように努力する同調性と友人との心理的距離の２つの指標を用いて４グループに分類している。同調性が高く心理的距離が近い「密着群」は自己実現的態度と被評価意識が高い傾向にあった。同調性が高く心理的距離が遠い「表面群」は自己実現的態度が低く自己閉鎖や人間不信がみられた。「表面群」について、中学生では対人的積極性がみられるのに対し、高校生ではみられなかった。同調性が低く心理的距離が近い「尊重群」は、中学・高校において自己実現的態度があり自己表明・対人的積極性がみられ、被評価意識は低く人間不信がなかった。同調性が低く心理的距離が遠い「孤立群」は、自己閉鎖的で対人的積極性が見られなかった。

松永，岩元（2008）の研究では、友人と理解しあいながら関係を深めようとしている「本音群」、友人との関係の深化を避け、友人との付き合いに対して希薄な

表２　友人関係のとり方と青年の心理的側面の特徴

	友人関係のとり方	青年の心理的側面
石本ら（2009）	中学生の友人関係スタイルによる自己肯定意識の比較	
	自己実現的態度	尊重群・密着群＞孤立群・表面群
	自己閉鎖的、人間不信	尊重群・密着群＜孤立群・表面群
	自己表明・対人的積極性	表明群＜ほか３群
	被評価意識・対人緊張	尊重群＜密着群・表面群
	高校生の友人関係スタイルによる自己肯定意識の比較	
	自己実現的態度	尊重群＞密着　、尊重群＞孤立群・表面群
	自己閉鎖性・人間不信	尊重群・密着群＜孤立群・表面群
	自己表明・対人的積極性	尊重群＞密着群　、尊重群・孤立群＞表面群
	被評価意識・対人緊張	尊重群＜密着群・表面群
松永，岩元（2008）	基本的信頼	「本音群」＞ほか４群
	対人的信頼感	「本音群」＞ほか４群、「気づかい」＞「無関心群」
	コミュニケーション能力	「本音群」＞ほか４群、「本音群 」「気づかい群 」「うわべ群 」＞「無関心群」
	自己解決能力・関係調整能力	「本音群 」＞「無関心群」「気づかい群」「独立群」
	精神的健康	「独立群」「無関心群」＞「本音群」
	＊得点が高いほど精神的に不健康	
岡田（2007）	自己閉鎖	内面的＜円滑＜回避
	傷つけられることの回避、傷つけることの回避	内面的＜回避＜円滑
	快活的関係	回避＜内面的＜円滑
	注目・賞賛欲求	内面的・回避＜回避・円滑
	他者評価過敏	内面的・回避＜円滑
	自尊感情	回避・円滑＜円滑・内面的
中園，野島（2003）	本音・深化	「本音」「自己中心」＞「独立」「深化回避」＞「無関心」
	評価懸念・関心	「深化回避」「本音」「自己中心」＞「無関心」「独立」
	広く・楽しく	「深化回避」「本音」「自己中心」＞「無関心」「独立」
	自己中心	「無関心」「自己中心」＞他３群、「独立」「深化回避」＞「本音」

注釈：表１の注釈を参照

「無関心群」、場を盛り上げ楽しくしようとする「気づかい群」、関係の深まりを避け表面的な楽しさを求める「うわべ群」、友人と関係の深まりを持ちながらも周りに左右されないで自己を確立している「独立群」の４つに分類されている。「本音群」が信頼やコミュニケーション能力、自己解決能力、精神的健康が高いのに対して、「気づかい群」や「無関心群」はそれぞれの得点が低かった。

岡田（2007）の研究は、内面的友人関係をとる傾向が強い青年、友人関係から回避し自分にこもる傾向をもつ青年、自他ともに傷つくことを回避しつつ円滑な関係を志向する青年の３つに分類している。円滑な関係を志向する青年は注目・賞賛欲求や他者評価過敏が高く、内面的友人関係を取る青年とは反対の結果であった。

中園，野島（2003）の研究は、友人との関わりが全体的に希薄な「無関心群」、自分の価値観を持ち、周囲に左右されないで関係を保持しつつ自己を確立している「独立群」、自分の内面を開示することを避けて形だけの円滑な関係を求める「深化回避群」、友人と深く関わったり本音で接したりすると同時に友人を傷つけないように注意を払っている「本音群」、本音で深く関わろうとする傾向が高いが、友人を傷つけることに対して注意を払わない傾向がある「自己中心群」に分類している。

以上４文献から、自己の内面を友人に表現し友人とともに過ごす青年、友人とのかかわりに距離を置いている青年、自他ともに傷つくことを恐れ、表面的な付き合いをする青年、自己の内面を他人に表現し個人で過ごす青年の特徴についてまとめた。

１）自己の内面を友人に表現し友人とともに過ごす青年

（1）友人関係のとり方

内面的友人関係をとる傾向が強く（岡田，2007）、深くありのままの自分で接している（松永，岩元，2008）。同調性が高く心理的距離が近い（石本ら,2009）ことや、友人と深く関わったり本音で接したりしており、同時に、友人を傷つけることに対して注意を払っている（中園，野島，2003）。

（2）心理的側面や社会的スキル

自己閉鎖や自他共に傷つくことを恐れること、注目・賞賛欲求、他者評価過敏が低く、自尊感情が高い（岡田，2007）。基本的信頼や対人的信頼、コミュニケーション能力、自己解決能力・関係調整能力が高く、精神的健康も高い（松永，岩元，2008）。本音・関係深化、評価懸念・関心、友人と広く楽しく関わる関わり方が有意に高く、自己中心傾向は低い（中園，野島，2003）。中高生では、自己実現的態度、充実感が高く、被評価意識、対人緊張が見られる（石本ら，2009）。

２）友人とのかかわりに距離を置いている青年

（1）友人関係のとり方

友人関係から回避し、自分にこもる傾向をもち（岡田，2007）、友人との関係の深化を避け、友人からの評価懸念や気づかいも少ない、友人とのつきあいについて意識が全体的に希薄である（松永，岩元，2008；中園，野島，2003）。同調性が低く心理的距離が遠い（石本ら，2009）。

（2）心理的側面や社会的スキル

快活関係を求めず、自己閉鎖的である。注目・賞賛欲求や他者評価過敏は見られないが、自尊感情が低い（岡田，2007）。基本的信頼・対人的信頼、コミュニケーション能力、自己解決能力・関係調整能力が低く、精神的健康も低い（松永，岩元，2008）。中高生では自己実現的態度、充実感が高く、自己閉鎖・人間不信は高い（石本ら，2009）。本音・関係深化、評価懸念・関心、広く・楽しく関わる関わり方が低く、自己中心傾向がある（中園，野島，2003）。

３）自他ともに傷つくことを恐れ表面的な付き合いをする青年

（1）友人関係のとり方

自他ともに傷つくことを回避しつつ、円滑な関係を志向する（岡田，2007）関係の深まりを避け、表面的な楽しさを追い求める傾向や、場を盛り上げて楽しくしようとする傾向も強い（松永，岩元，2008）。同調性が高く心理的距離が遠い（石本ら，2009）。中園，野島（2003）は、本音でつきあいを避ける傾向が最も強く、友人からの評価懸念、楽しくしようとする傾向も強い。自分の内面を開示することを避け、互いに傷つけることや傷つくことを恐れ、形だけの円滑な関係を求めるとしてとらえている。

（2）心理的側面や社会的スキル

傷つけられること・傷つくことを回避し、注目・賞賛欲求や他者評価過敏が強い（岡田，2007）。基本的信頼感、自己解決能力・関係調整能力が低く、コミュニケーション能力は高い（松永，岩元，2008）。中高生では、自己実現的態度、充実感、自己表明･対人積極性が低い、自己閉鎖、人間不信、被評価意識、対人緊張が高い（石本ら，2009）。評価懸念・関心が高く、広く・楽しく付き合う（中園，野島，2003）。

４）自己の内面を他人に表現し、個人で過ごす青年

（1）友人関係のとり方

内面的友人関係をとる傾向が強い（岡田，2007）。友人に対するある程度の気づかいと関係の深まりを持ちながらも周りに左右されない、多くの人と仲良くしたりすることはない（松永，岩元，2008）。同調性が低く心理的距離が近い（石本ら，2009）。自分なりの価値観を持っていて周りに左右されず、交友関係の広さを求めることや場を楽しくしようとはしない。関係を持った上で自己を確立している（中園，野島，2003）

（2）心理的側面や社会的スキル

中高生では、自己実現的態度、充実感が高く、被評価意識、対人緊張は低い（石本ら，2009）。友人との関係深化を回避することや、気づかいが平均的（松永，岩元，2008）で、自己閉鎖や自他共に傷つくことを恐れること、注目・賞賛欲求、他者評価過敏が低く、自尊感情が高い（岡田，2007）。広く楽しく付き合う傾向が低い（中園，野島，2003）。

自己の内面を表現し友人と深く付き合う青年の心理的側面は、他者評価を意識することなく自尊心は保たれ、基本的信頼がみられる。コミュニケーション能力や関係調整能力があり、社会的スキルが高い。友人関係を回避し同調性が低い青年の心理的側面は、自己閉鎖的で注目・賞賛欲求や他者評価意識が低く、自尊感情や基本的信頼が低い。コミュニケーション能力や関係調整能力は低く、社会的スキルも低い。場を盛り上げて楽しくしよ

うと、円滑に表面的な付き合いをする青年の心理的側面は、基本的信頼感が低く、自他ともに傷づくことを避ける。コミュニケーション能力は高いが、関係調整能力は低い。自己の内面を表現し周りに左右されることなく友人関係をとる青年の心理的側面は、他者評価の意識は高くなく、友人と深く付き合うことを回避することもない。

４．古野，藤原（2003）の研究

古野，藤原（2003）の研究におけるアイデンティティの状態の分類は、他研究の分類と異なり「危機の有無」と「自己投入の有無」という青年の経験によって分類されている。

アイデンティティの状態について古野，藤原（2003）は、同一性の地位を６つの地位に分類し、各地位における友人との付き合い方を比較している。各地位は、危機の有無と自己投影の有無によって分類される。危機の有無とは、自分にはどのような職業、役割、理想などが適しているのかについて迷い考え思考する時期の有無のことであり、自己投入の有無とは、自己の定義を実現し自己を確認するための、独自の目標や対象への努力の傾注の有無のことである。各地位の内容を表３に表す。

「同一性達成地位」以下「達成」、「同一性達成－権威受容中間地位」以下「達成－権威受容」、「権威受容地位」

表３　６つの同一性地位

同一性地位	地位の内容
同一性達成	過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている。
同一性達成－権威受容中間	中程度の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者
権威受容	過去に低い水準の危機しか体験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者
積極的モラトリアム	現在は高い水準の自己投入は行っていないが将来の自己投入を強く求めている者
同一性拡散－モラトリアム	現在の自己投入の水準が中程度以下の者のうちで、その現在の自己投入の水準が「拡散」地位ほどには低くないが、将来の自己投入の希求の水準が「モラトリアム」地位ほどに高くない者
同一性拡散	現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も低い者

注釈：表１の注釈を参照

表４　地位間の比較

付き合い方	地　位
嫌われないように気を遣っている	「拡散－モラトリアム」「拡散」＞「達成」「達成－権威受容」 「モラトリアム」＞「権威」
ありのままの自分を出している	「達成」「達成－権威受容」＞「拡散－モラトリアム」「拡散」 「モラトリアム」「拡散－モラトリアム」＞「拡散」
自分と合わない人とも付き合う	「達成」「達成－権威受容」＞「モラトリアム」「拡散－モラトリアム」「拡散」
悩みの相談をする	「達成」＞「モラトリアム」「拡散－モラトリアム」「拡散」 「達成－権威受容」「モラトリアム」「拡散－モラトリアム」＞「拡散」
相手を信じている	「達成」「達成－権威受容」＞「モラトリアム」「拡散－モラトリアム」「拡散」 「権威受容」「拡散－モラトリアム」＞「拡散」
自己理解が深まる	「達成」「達成－権威」＞「権威」「モラトリアム」「拡散－モラトリアム」「拡散」
相手を独占する	「拡散－モラトリアム」＞「達成」「達成－権威受容」「モラトリアム」
傷ついても本音で付き合う	「達成」「達成－権威受容」＞「拡散－モラトリアム」「拡散」 「モラトリアム」＞「拡散」
励ましあう	「達成」＞「拡散－モラトリアム」「拡散」 「達成－権威」「モラトリアム」「拡散－モラトリアム」＞「拡散」
深いつながりを持つ友人を作らない	「拡散－モラトリアム」「拡散」＞「達成」「達成－権威」
共通体験で結びつく	「拡散－モラトリアム」＞「達成」「達成－権威」 「拡散」＞「達成」

注釈：表１の注釈を参照

以下「権威受容」、「積極的モラトリアム地位」以下「モラトリアム」、「同一性拡散－モラトリアム地位」以下「拡散－モラトリアム」、「同一性拡散地位」以下「拡散」と略す。これらの地位に対応する友人関係の特徴を表４に表す。

「達成」や「達成－権威」は、相手を独占しようとすることや共通体験での結びつきが低く、相手を信じありのままの自分を出しており、自己理解が有意に高い。「拡散－モラトリアム」「モラトリアム」「拡散」は、嫌われないように気を遣い、自分と合わない人とも付き合うことや相手を信じることが低い。「拡散－モラトリアム」「拡散」は、深いつながりをもつ友人を作らない傾向がみられる。「拡散－モラトリアム」は相手を独占しようとする面がみられ、「拡散」は、傷ついても本音で付き合おうとする姿勢が低い。

以上、アイデンティティの状態、友人関係のとり方、青年の心理的側面の特徴についての分析結果を、概念枠組みに沿って図２、図３でまとめた。

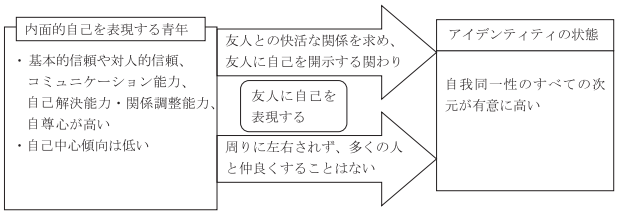

図２　内面的友人関係をとる青年の心理的側面とアイデンティティの確立

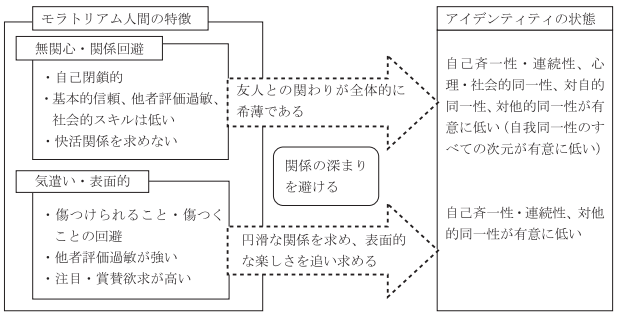

図３　友人関係に無関心・表面的な青年の心理的側面とアイデンティティの確立

Ⅳ　考察

以上の結果から、友人関係の取り方と、アイデンティティの発達の段階にそれぞれ特徴的な関係がみられた。そして、それぞれの友人関係の取り方と心理的側面にも特徴がみられたため、青年がとる友人関係の背景についても考察していく。

１．アイデンティティの確立と友人関係の特徴の関係

自己の時間的連続性や不変性の感覚を持ち、社会と自分自身との適応的な結びつきの感覚を持つ青年は、積極的に友人との関わりを持ち、自己を開示することで自分を振り返り自分とはどのような人間であるかを明確にし、社会の中の自分を確立していくと考えられる。堀岡（2009）は「刹那群」が自我同一性のすべての次元が有意に高かったことから、物事を深く考えず自由人である「刹那群」は青年期の危機を乗り越えて安定した時期にあると推測している。自己の確立がされると自分に自信を持ち他者評価を意識することなく自由に行動することができると考えられる。辻（2004）の研究から16～17歳で友人によってキャラクターの切り替えがないことが、鑪（2002）のいう自己の連続性ないし一貫性の確立を促すような影響を及ぼしていると考えられる。

自己を開示する友人関係をとる青年の心理的側面については、自分の内面を友人に開示する関係がアイデンティティの発達を促しているということが明らかになった。さらに、そのような関係をもっている青年の中でも友人とともに過ごすことが多い「密着している青年」と、友人と関わることをあまり重視していない「孤立している青年」がみられた。友人と密着している青年は友人と本音で付き合い、今以上に深く付き合いたいと思っていると同時に友人を傷つけないように注意を払っている。基本的信頼感やコミュニケーション能力や関係調整能力などの社会的スキルは高いが、一方で、他者からの評価懸念があるという結果もある。これは自己の確立に未熟な部分を残す青年が自己を表現することに不安をもちながら友人と接しているため、自分がどのように他者から見られているか意識していると考えられる。中高生で被評価意識や対人緊張がみられるのは、中高生はアイデンティティの確立にむけて成長している段階であるためと考えられ、研究によって自己を開示する友人関係を持つ青年の被評価意識の有無に差が出ているのは、自己の自我同一性の尺度が用いられていないためであると考えられる。

友人と関わることをあまり重視せず孤立している青年は、友人との関係を深めることや気遣いが平均的で、交友関係の広さを求めたりせず、関係を持ったうえで自己

を確立している。アイデンティティの確立に他者との関わりの中で自己表現していくことが重要であるということは、アイデンティティが確立された者にとって密着した友人関係というのは重要性が低くなっていると推察する。

以上のことから、アイデンティティの確立がみられる者は、他者への基本的信頼や自尊心、コミュニケーション能力などの社会的スキルが高く、自己中心傾向が低いという共通点がみられるが、アイデンティティの発達を促すための友人関係の取り方は個人に違いがあるといえる。それは、アイデンティティの発達を促すための自己表現の必要性が低くなったためと考えられる。

２．アイデンティティの不確立と友人関係

自我同一性のすべての次元が有意に低い値を示す青年、つまり、自己の時間的連続性や不変性の感覚や社会との適応的な結びつきの感覚、自己の明確さ、他者からみた自分と本来の自分が一致しているという感覚を持っていない青年は、友人に嫌われないように気を遣い、友人からの評価を気にしながら表面的な付き合いをしている者（松下，吉田，2009）と、友人と表面的な関係で気遣いがあまりみられない者（堀岡，2009）という２つの特徴をみることができる。一方、アイデンティティの確立の状態として自己斉一性・連続性や対他的同一性の感覚が低いことが特徴の青年、つまり、自己の時間的連続性や不変性の感覚（自分のまとまり感や常に自分であるという感覚）、他者から見た自分と本来の自分が一致している感覚が乏しく部分的な自我の発達みられる青年の中にも、友人に気を遣う表面的な関係を持つ者（堀岡）と友人関係に無関心な者（松下，吉田）がみられる。したがって、アイデンティティの確立の状態で分類し、それぞれの群の友人関係の取り方を比較すると、松下と吉田と堀岡の研究の結果が部分的に一致していないということになる。両研究の多次元自我同一性尺度はMEIS（谷，2001）を用いており、MEISについて松下と吉田は、主観的に自我同一性の確立を図るものであり、「気遣い」関係をとる人は、自分の内面に対する意識の強さから自己評価が厳しくなり、自己を掴みきれていないと評価しやすいと推測している。このことから、使用した尺度が客観的に測るものではないために、結果に差がでたものと推察される。さらに、今回の文献検討という研究方法では直接尺度のコントロールができないため、アイデンティティの確立の他の要素の影響が加わって結果に差が出たと考えられる。

以上を踏まえても、この結果は表面的な友人関係や希薄な友人関係はアイデンティティの確立に効果的でないことを明確にしている。宮下（1998）の「相互信頼」や「社会性」「社交性」がアイデンティティと有意に正の傾向があるということが、反対に、それらの要素が少ないことがアイデンティティに負の傾向を表していると考えられる。そして、自我の発達の中でも、「自己斉一性・連続性」「対他的自我同一性」が有意に低い値を示していることから、自分のまとまり感や常に自分であるという感覚や他者から見た自分と本来の自分が一致しているという感覚は友人と関わる中で自己を表示し、友人から見られている自分を確かめながら確立していくと考えられる。さらに、辻（2004）の結果から、友人と関わる際に、複数の自己を使い分けている者は、一貫した自己の形成につながりにくいことが分かる。

友人との関係に距離を置いている青年は、他者と円滑な関係を保とうとする傾向はなく、友人との関わりが希薄である。心理的側面は、他者からの評価懸念はみられないが、基本的信頼・対人的信頼や自尊感情が低い。基本的に友人であっても他者を信頼していないことや自分に自信がないため、自己の開示につながらないことや、友人との関わりに距離を置いていることからコミュニケーション能力など社会的スキルが低く、さらに友人との関わりを希薄にしていく要因となる。

そして、友人との関係に距離を置いている青年や表面的な友人関係をとる青年は小此木（1984）のいう「モラトリアム人間」の特徴である「無関心」「やさしさ」「関係回避」を表した部分がみられている。「モラトリアム人間」の特徴を持つ青年はアイデンティティの確立が不十分となることが多いと考えられる。

自他ともに傷つくことを恐れて気を遣いながら友人と関わる青年は、関係の深まりを避け、表面的な形だけの関係を求めている。心理的側面は、基本的信頼・対人的信頼は低く、他者からの評価懸念や賞賛欲求が強い。関係に距離を置いている青年と同様に他者への信頼は低いことに加えて、友人を傷つけることや傷つけられることの恐れから、本音で友人とつきあうことがみられない。他者からの評価を意識しながらも友人と関わりがあるため、他者からみた自分について関心を持ち、自己を振り返ると推察される。関係に距離を置いている青年と比較

すると自己と向き合い、発達段階のアイデンティティの確立にむけて取り組んでいると考えられる。古野と藤原（2003）の結果から､「傷ついても本音で付き合うという」について、達成群が最も有意に高く拡散群が最も有意に低いことから、自他共に傷つくことを恐れながらも関わりを持つことは自我の発達の促進につながると考えられる。

中高生の良好な友人関係のとり方と大学生でアイデンティティの確立が見られる青年の友人関係と一致するところがあり、友人関係がうまく取れている青年は自我同一性の発達に肯定的な影響を及ぼしている。そして、良好な友人関係の形成が早いほど学校適応も見られることから、社会性の向上につながると考えられる。

中高生を対象とした研究（辻，2004；石本ら，2009）から、自己を一つに保ち、年齢相応、もしくは年齢よりも少し早い友人関係スタイルをとっている青年は学校不適応に陥ったり心理的適応を損なったりすることが少なく、適切な友人関係を取る青年はその後のアイデンティティの発達が良好となる可能性が高い。

Ⅴ　おわりに

青年期の発達課題であるアイデンティティの確立を促進する友人関係が明らかになり、早い年齢から良好な友人関係を推進することで、自我の発達につながり将来の自己の方向性を決定する際に自ら積極的に取り組むことができるようになる。さらに、本研究の成果によって、現代社会に特徴的なモラトリアム人間が自我同一性の確立のためのプロセスとして自分の意思を表現していくことでアイデンティティの確立と自分の意思に沿った職業決定につながると考えられる。

今回の研究では、文献検討による分析であるため研究方法・尺度が統一されておらず、結果に差が出てしまっていることや、調査対象の大学によって、研究参加者の偏りが存在する可能性があり、本研究の調査結果をわが国の全ての若者に対して一般化することに慎重である必要がある。

この研究では、横断的に大学生の自我の状態と友人関係の関係性について明確にされたが、ある程度友人との関わり方が確立された大学生が友人関係のスタイルを変えることができるのか、その効果としてアイデンティティの確立の促進につながるのかについて縦断的に研究を実践し証明するという課題がみえてきた。

自我の確立には内面的な自己を表現することが重要であり、友人と本音で付き合わず表面的に付き合っている青年は、本音で付き合っている青年と比較すると自己斉一性・連続性や対他的同一性の感覚が未熟で、それらの感覚は自己を表現する中で自己を形づくり、友人から見られている自分を確かめながら確立していくと考えられる。本音で付き合う青年は自我の発達だけでなく心理的側面においても肯定的な結果がでており、自己を表現し本音で付き合うということは青年の心理発達の広範囲に肯定的な影響を及ぼしていることが明らかとなった。

本研究は、日本赤十字豊田看護大学卒業研究に加筆修正したものである。

引用文献

Erikson.E.H（1959）：Identity and the life cycle（エリクソン、E.H. 小此木啓吾（訳編）（1973）．自我同一性．誠信書房）

東清和，津本信博，安達智子（2002）：現代青年の進路意識―概念の整理と大学生の傾向について―，早稲田教育評論，16(1), 71-85

堀岡園子（2009）：青年の友人関係および集団活動への関わり方と自我同一性との関連，北星学園大学大学院論集 1, 85-97

古野景子，藤原珠江（2003）：現代青年の友人関係とアイデンティティ確立との関連，長崎純心大学心理教育相談センター，第２巻 , 13-24

石本雄真，久川真帆，斎藤誠一，上長然，則定百合子，日潟淳子，森口竜平（2009）：青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連，発達心理学研究，20(2), 125-133

厚生労働省（2011 年 10 月 1 日）：新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移，Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryo/08102203/001/014.htm

松永真由美，岩元澄子（2008）：現代青年の友人関係に関する研究，久留米大学心理学研究，No7, 77-86

松下姫歌，吉田愛（2009）：学生における友人関係と自我同一性との関連，広島大学心理学研究，9, 207-216

宮下一博（1998）：青年の集団活動への関わり及び友人

関係とアイデンティティ発達との関連，千葉大学教育学部研究紀要，第 46 巻Ⅰ：教育科学編，27-34
中園尚武，野島一彦（2003）：現代大学生における友人関係への態度に関する研究－友人関係に対する「無関心」に注目して－，九州大学心理学研究，第 4 巻，325-334
岡田努（2007）：大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について，パーソナリティ研究，15(2), 135-148
岡田努（2010）：青年期の友人関係と自己，世界思想社
小此木啓吾（1984）：モラトリアム社会のナルシスたち，朝日出版社
落合良行，伊藤裕子，斎藤誠一（2004）：青年の心理学，有斐閣
斉藤誠一（2004）：人間関係の発達心理学４　青年期の人間関係，培風館
下山初彦（1986）：大学生の職業未決定の研究，教育心理学研究，第 34 巻第 1 号，20-30
鑪幹八郎，山下格（偏）（2003）：アイデンティティ，日本評論社
鑪幹八郎（2002）：アイデンティティとライフサイクル論，ナカニシヤ出版
辻大介（2004）：若者の親子・友人関係とアイデンティティ―16 ～ 17 歳を対象としたアンケート調査の結果から―，関西大学社会学部紀要，(35)2, 147-159